



イラン人の人づきあいの機微を知る

藤元 優子
大阪大学教授

大物監督の人情コメディ

「ママのお客」は、イランの著名な児童文学作家フーシャング・モラーディー・ケルマーニーの原作を元に、ダリーウシュ・メヘルジュイが制作・監督した大ヒット作である。メヘルジュイは、イラン社会を象徴的に描いた「牛」（一九九九年）でヴェネツィア国際映画祭をはじめとする国際映画祭で受賞して一躍有名になった、イラン・ニューウェーブ映画を代表する監督である。イラン社会への

批判や風刺を込めたインテリ好みの作風で知られるが、本作は監督が初めてラジオ・テレビ局とタイアップして撮った万人に愛される人情コメディで、イランのフェアジュル国際映画祭で作品賞を受賞した。



願掛け行事のごちそう作り(撮影:羽田美希、シーラズ、2005年)

下町に生きる人びとの心意気

舞台は民家が建て込んだテヘランの下町。薬物依存や家庭内暴力、戦争難民など、さまざまな問題を抱える複数の家族が古屋をシェアしている。その夫婦と子ども二人の一家に新婚の甥夫婦が訪ねて来ることになり、お母さんは途方に暮れる。夫に何カ月も給料が入らず、今日の暮らしにも困っているのだ。甥夫婦に良いところを見せたいのにお茶すらまともに出せそうにない。そこで、家族だけでなく、隣人たちを総動員したおもてなし作戦が始まり、すったもんだの末、ようやくすばらしい料理ができあがって楽しい宴会になる。お母さんがストレスで倒れるというハプニングも事なきを得て、長い一日が終わる。重い社会問題も織り込まれてはいるものの、人は貧しくとも寄り添い合い、助け合えばどんな困難でも乗り越えられるものだというメッセージが込められたハッピーエンドに心なごむ秀作である。

日本に似たイランの人情

家族単位で互いの家を訪問し合うことの多いイラン人にとって、おもてなしは人づきあいの基本である。面子や義理を重んずる彼らのおもてなしでは、建前が前面に出る。特に客を褒めちぎる表現の豊かさ

「ママのお客」

原題: مهمان مامان

2004年/イラン/ペルシア語/108分/DVD(日本語)なし

監督: ダーリウシュ・メヘルジュイ

出演: ゴラフ・アディネ、ハサン・プールシラズィほか

2019年2月のみんぱく映画会にて上映予定(詳細は12頁をご覧ください)



願掛け行事での共食
(撮影:羽田美希、スィールジャー、2006年)

きたら、口下手な日本人には到底太刀打ちできない芸術品である。客の方には、主人のことばや態度の端々から相手の本音を忖度して対応する感受性が求められる。作品中のお母さんは、母子家庭で苦学して空軍士官になった甥が自慢の種なのに、甥夫婦を「気遣いの要る客」とよぶ。大切だからこそ、十分にもてなしてやれなければ面目丸つぶれだからである。甥夫婦もそんなお母さんの立場をわかっていればこそ、何度も席を立つとするが、叔母夫婦への遠慮が邪魔をして、結局一晩泊まっていく羽目になる。建前と本音が交錯し、善意の応酬の裏で困惑顔を見せる様子に、「そうそう、まったく大変だよ」と身につまされつつ苦笑させられる。話は大きくなるが、そんな人情の共通点こそイランが大の親日国である理由のひとつに違いない、とわたしは常々思っている。

映画へのオマージュ

お母さんの奮闘ぶりをよそに、一人で自分流のおもてなしに突っ走ってしまうお父さんも、味わい深いキャラクターである。原作ではタイル工場の労働者なのだが、この作品ではつぶれかけの映画館で雑用をしている映画マニアに変わっている。イラン映画だけでなく外国映画も熱愛する彼の家は、なけなしの金をはたいて買った映画ボスターやスターのプロマイドだらけで、お客にも古いイラン映画のビデオを見せ、うん



女たち、お客のために知恵と食材を出し合う(映画「ママのお客」より、提供:福岡市総合図書館)

ちくを傾けて悦に入る。最初は汚いひげ面のおっさんにしか見えないお父さんが、映画の魅力を熱弁し、歌ったり踊ったりするうちに、何だか可愛く思えるようになるのはご愛敬である。おそらくスクリーンの向こうにいる、監督をはじめとするスタッフの映画愛がそのまま投影されているからなのだろう。そして映画好きなら、随所で挿入される国内外の映画作品やスターの写真、ビデオや宣伝文句のバラエティの豊富さを堪能する、そんな楽しみ方もできる作品である。